

書 評

林田愼之助 『中國中世文學評論史』

(東洋學叢書)

東京 創文社 一九七九年二月

本文五四三頁 索引二〇頁

評者がここで紹介して、若干の感想をのべようとする『中國中世文學評論史』は、林田氏の「中國文學研究の處女論文集である」(自序)。林田氏は、一九五八年に「嵇康評傳」を公にされて以來今日に至るまで、おもに魏晉の詩人および中世の文學理論を對象とする論考を矢つぎばやに發表して、きわめて精力的な研究を續けておられる。なかでも、漢魏六朝の文學理論研究をここ十數年にわたってリードしてこられた事實は、われわれのよく知るところである。

鈴木虎雄氏『支那詩論史』、青木正兒氏『支那文學思想史』、

書 評

『清代文學評論史』、郭紹虞氏『中國文學批評史』、朱東潤氏『中國文學批評史大綱』、羅根澤氏『中國文學批評史』等が、中世文學思想史研究の分野において「それぞれの視角と方法に特色を具えた研究成果をもたらしてきた」(自序)が、そこで發掘紹介された文藝理論、文學思想の「資料がともすれば平面的な整理と解説に落着き、個別の文藝理論の全貌を立體的に把握することも、その時代の文學思想の構造を正確に解きあかすこともできないままに終っている」と指摘する林田氏は、その具體例として次の三點をあげ、それらが同時にこれまで「研究を進めるにあたつて、たえずみずからにつきつけた課題でもあつた」ことを明らかにされている。その三點とは何か。

(Ⅰ) 批評家の生活と思想から、文藝理論の生成過程と立論の必然的な契機が分析されていない。

(Ⅱ) 批評家がその時代の文學と思想の狀況にかかわつてゆく内的必然性が明らかにされていない。

(Ⅲ) 詞華集編纂行爲のもつ批評性が研究視野に入れられていない。

管見によれば、ここに要約した點が五百頁を超える大冊である本書の、全體を通じて底流する特徴を形成していると思われる。それについては後ほどあらためて見ることにして、まず本書の構成を一通り紹介しておこう。

本書は「自序」、六章からなる本文と「索引」（人名索引ならびに書名・篇名索引、なお後者は「體裁上の繁雜化を避けるために中國人の研究論文及び邦人の研究書、研究論文は除くことにし」ている）から構成されており、本文の章立ては次の通りである。

第一章 總論

第二章 魏晉時代の文學思想

第三章 魏晉時代の詩人の思想

第四章 齊梁時代の文學理論 上

第五章 齊梁時代の文學理論 下

第六章 隋唐時代の文學思想

さらに各章がそれぞれの節に分かれて、都合二十二を數える。煩をいとわず列舉すると、第一章は「中國文學評論史への視座」、「漢魏六朝文學論に現れた情と志の問題」、

第二章は「兩漢魏晉の辭賦論に流れる文學思想——左思・摯虞の場合」、「『典論』論文と『文賦』」、「葛洪の文藝思想」、第三章は「阮籍詠懷詩考——その孤絶の意識をめぐって」、「嵇康の飛翔詩篇」、「魏晉南朝文學に占める張華の座標」、「左思の文學」、「郭璞における詩人の運命」、第四章は「宋書」謝靈運傳論と文學史の自覺、「裴子野『雕蟲論』考證——その復古文學論の構造と制作年代」、「文心雕龍」文學原理論の諸問題」、第五章は「鍾嶸の文學理念」、「南朝文學放蕩論の美意識」、「蕭綱の『與湘東王書』をめぐって——森野氏論文『簡文帝の文章觀』批判」、「『文選』と『玉臺新詠』編纂の文學思想」、第六章は「顔之推の生活と文學觀」、「唐代古文運動の形成過程」、「韓愈における發憤著書の說」、「韓愈の散文表現論」（この章には附論として）「朱子の文藝論」。

總論での概觀のもとに、漢代から唐代に至るまで（さらには南宋にも及ぶ）、中國文學批評史における目ぼしい作品はほとんど網羅されていて、これを一瞥しただけで、本書の扱う範圍の廣さと掘り下げる程度の深さは容易に想像で

きよう。

本書の目次を見て、一つだけ他と異なった趣きの章があることに気づかれた読者も多いことだろう。それは第三章で、専ら阮籍、嵇康、張華、左思、郭璞といった魏晉を代表する詩人の文學作品を對象として、文學評論プロパ―の章と異なっている。しかし、これとても詩人の思想をその中から探ろうとするものであって、文學評論史の一環としての地歩を占めていることは、林田氏自らの次のことばを擧げるだけで充分明らかになろう。――「魏晉から六朝を経て唐初に至るまでの時代は、中國文學の思想、とりわけ文藝批評學の成熟期にあたる。……この間の文學的營爲が正當な翫賞と評價をうけないならば、おそらくは基本的に中國文學の思想と様式美の核心に迫るにはいたらぬであらう。本書において、詩と散文にわたる文藝批評學の生態分析のみならず、私の好みに偏しての選擇ではあるが、魏晉期の詩人群の思想に照明をあててきたのも、この時代の文學の實態を多少ともあきらかにしたいがためであった。」(自序)

書 評

評者は次に、從來の文學批評史のもつ缺陷として林田氏の指摘された三點を、本書の内容にそくして具體的に取りあげていかなばならない。

次序は逆になるが、先に(Ⅲ)の詞華集編者の批評美學の問題。林田氏のいわれる通り確かにこれまでの批評史では不當に輕視されていた。たとえば郭紹虞氏『中國文學批評史』も第四篇第一章「魏晉之文學批評」に「總集之結撰者」なる一節を設けて、摯虞「文章流別論」と李充「翰林論」について記述するが、内容の平面的な解説の域にとどまっているといっても過言ではあるまい。

これに對して林田氏は、魏晉における批評文學の發生と關連させてとらえようとする(本書九七頁)。漢代までの思想表現の自由のないところに文藝批評の發生と成熟はありえず、後漢末に儒教萬能の時代が終りをつけてさまざまな思想を享受できるに至ったことが、批評文學の發生の背景にあったとし、「しかしながら、それだけが批評文學の發生をうながした理由ではなかった。この時期に詩文選集の本格的な編著が出現していることは見逃せない。例えば『文

章流別志論』であるが、これはもともと『文章流別集』と稱する詞華集の編著があつて、これにくつついていた文體批評の文藝論であつた。詞華集の編集には作品の選擇をともない、作品の選擇には必ず編者の好みがともなう。その好みを理論的に武裝し主張するとき、批評文學が發生する。」と。

また本書總論の第一節「中國文學評論史への視座」では、『詩文選集の編纂と文學批評』の一目をさいて、詞華集編纂史の概觀に充てており、そこ(六、七頁)では、『隋書』經籍志の〈總集〉の項に、摯虞の書とつらなり、昭明太子(五〇一—五三二)の『文選』、劉勰の『文心雕龍』、鍾嶸の『詩品』があがつている。このことは總集Ⅱ詩文選集と、批評との關係を考えるうえで重要である。つまり『文章流別集』ならびに『文選』は詩文を選録した選集であるが、これが文學批評の專著である『文心雕龍』『詩品』と一括されて〈總集〉の項に入っていることは、ふるく中國においては詩文選集が文藝批評學のうちに包括されていたことを意味するからである。それは多分、選集の編集者がそれ

ぞれ個々の作品を鑒別し、取捨する批評眼を必要としたからであろう」という。

詞華集編纂行為の具有する文學批評性を念頭におきつつ、批評史を考究しようとする態度は、さりげなくちりばめられた指摘によつて隨所にうかがわれる。たとえば、張華の詩を論ずる中で、彼の三首の「雜詩」のうち、『文選』に採録される一首を、『玉臺新詠』は意識的にはずし、他の二首をあげているのは、總集編者の選擇基準を逆に照射しているとのべる(二〇二頁)點など。

しかし、何といつても『文選』と『玉臺新詠』編纂の文學思想」という一節が別にもうけられている事實ほど、林田氏の並並ならぬ心くばりを雄辯に物語るものはない。

『文選』と『玉臺新詠』の體裁および内容の相違は「一目瞭然である」として、林田氏は「この對蹠的な性格をもつ二つの詞華集がおなじ梁の時代に踵を接して編纂されねばならなかった必然性を考え」、「齊梁文學の狀況と思想のなかで、この二書の位置づけを考え」(四〇〇頁)ようと意圖される。これは、林田氏がみずからにつきつけた(Ⅱ)

その時代の文學と思想の狀況にたいしてかわつてゆく必然性の探求、という課題ともつながっている。

このように従來の批評史の視野に缺落しがちであつた、アンソロジー編纂の背景に存在する文學思想を、林田氏はその時代の文學の狀況全體のなかで把握しようと試みているが、それは基本的には、「きわめて概括的表現をすれば、中國における文學批評の發生形態はつねに文學選集（總集）の編集を土壤としており、そこに移植される文學作品の選擇にあつて、當然問題となる編者の美學的・倫理的評價基準の如何によるとさえいえる」（七頁）という認識にもとづいている。

次に（Ⅱ）批評家が時代のどの文學と、どのような文學的責任のもとに、いかなる文學的視座をすえてかわつていたかが、本書のなかでどのように追求されているかを検証するわけだが、この點には周到な配慮が施されていて、本書のどの頁を開いても容易にうかがい知られよう。といった批評家が文學批評を行う場合、作品もしくはそれに準ずるものが必ず意識對象として把握されているわけだから、

その文學批評を分析することで、時代の文學にたいする批評家のかかわり方はおのずとあらわれてくる。したがってここでは、『詩品』を扱った節から、基調をなす結論を舉例するにとどめる。

「鍾嶸の『詩品』は品評という體裁をとりながら、あきらかに彼の目前にある齊梁文學の弊風である典故用事の繁雜化を指彈し、四聲八病説の聲律による拘束化を痛撃して、『即目』『直尋』の表現方法によつて、『眞美』の詩風を確立することをはかつたものであつた。そこに鍾嶸が沈約に對する個人的な宿憾の情をこえて、時代の文學的状況にかかわつてゆく文學的責任が賭けられており、『詩品』を著さねばならぬ內的必然性が存在していたといえるであらう。」（三六三頁）

この部分にも『詩品』を著さねばならぬ內的必然性」とあるように、本書には「必然性」が頻出する。「自序」の（Ⅰ）（Ⅱ）における「立論の必然的な契機」「文學と思想の状況にかかわつてゆく內的必然性」が象徵するように、これは、その文學批評がなぜ生み出されたのかを執拗に追

い求める姿勢に起因するのだが、時としてそれは牽強附會の印象をまねがれない。そしてそれは精緻な分析を経ずに、結論が先入見として讀者にうえつけられてしまうことになる。

一例をあげよう。萬物と同じく人間の精神も平衡を得ないときに文學が生み出されると説く韓愈の「送孟東野序」に對し、『送孟東野序』における平らかならざるものがすぐれた文學を生むという不平動機説が、すべての文學創造の動機ではないのに、それがすべてであるかのように説く韓愈は、自己の體驗に固執する者特有の偏向性にみちていた」（五二八頁）と斷定するが、韓愈のこの文章と彼の生活體驗をとらえて、それがすべての動機であるかのように説くのは、實は林田氏自身ではないだろうか。

韓愈が文學論の中核にすえている、とまず結論される「氣」「奇」にしても、「氣」についていえば、梁肅の文氣論の系譜をふまえて展開する（五二〇頁）だけでは、韓愈が「氣」を貴んだであろうことは説明できても、不充分であるし、「奇」を「異なる者」「非常の者」ととらえる段階を

こえて、「陳言」（清水茂氏、中國詩人選集『韓愈』參照）と對比させるなりして表現の新しさの次元にまで高めないと、なぜ中核に位置するかが具體的には理解しがたい。

社會的環境と結びつけて辭賦論を考えようとする方法のなせるわざか、儒教の絶對的支配の有無によって兩漢（ただし前漢武帝期をのぞく）、西晉と魏晉とを分類し、辭賦に道義的效用主義をみとめる揚雄、班固、蔡邕、左思、摯虞と、純粹な文學表現と考える司馬相如、曹丕、曹植、陸機、陸雲とをそれぞれ對應させる（五八頁）のは、あまりにも圖式的すぎよう。このような二大別したいが必ずしも納得しがたいところを含むが、しばらくそれは措くとしても、司馬相如の時代の賦は、楚辭から受けついだ豊かな想像力、誇張された表現、強い娛樂性といった側面をもっていたのに對し、左思の頃になると事實に裏づけられた忠實な寫實描寫という大きな違いがあるわけで、辭賦觀の差異も、賦の發想そのものの變容に起因する要素をぬきにしては、考察できないと思う。

『詩品』に「志」の概念がほとんどみられぬ理由を、復

古的道義主義にまぎらうことを恐れて鍾嶸が意識的に避けているからだと推測される（四四頁）。にわかに斷じたいが、『詩品』の對象が、がんらい詩經の四言詩でなしに五言詩のみに限定されている事實に據るのではないだろうか。

ついでながら、本書は批評家の同時代の文學へのかわり方の探求をひとつの主眼としているが、文學以外の分野、たとえば畫論や書論を包攝した藝術論、それから人物論などとの關連（批評用語、構造の比較分析の上になつての）は、あまり顧慮されていない（三七五頁あたり以外は）。しかしながら、これらを視野に入れないで批評史を考えることはできない。もっともこれは林田氏だけでなく、われわれ自身に與えられた課題でもあるが。

今度は、（一）批評家の生活と思想のいとなみのなかから、文藝理論の生成過程と、その立論の必然的な契機がどのように分析されているかを見ることにしよう。文學思想にかぎらず、あらゆる思想、理念は、あくまで人間が生み出したものであり、その人間個人の生活經驗や内面の問題（これだけで充分でないのはもちろんいうまでもないが）

を捨象して考えることはできない。したがって林田氏がこの點に特に留意されているのは當然だといえよう。この視點も（Ⅱ）と同じく本書全體を一貫して流れており、また、第三章においてこの傾向が殊に顯著であるのも、「詩人の思想」と銘うっていることを考えれば容易に想像しうる。

「文賦」において「陸機が『典論』論文を意識すること」で否定的にのりこえることができた」（七八頁）ことの實證がその眼目の一つである第二章第二節にそくしていえば、『三國志』裴松之注引の胡冲「吳歷」に據ると、吳の孫權とともに『典論』論文の贈られた相手の張昭が、陸機の母の祖父、つまり外曾祖父にあたる人物であつたことを指摘して、いう。「陸機のなかにながれるすぐれた文學的資質はおそらくは父方陸氏の忠の血統よりも、より多くは母方張氏の血統を受けついだものであらう。『少くして異才有り、文章世に冠たり』（晉書・陸機傳）といわれた陸機だけに、この母方の家寶として珍重されていたであらう誇り高き傳世品——『典論』の存在には深い關心を拂い、それを親しく手にとつて讀みとる機會を持ったはずである。」（七

五、六頁)

第六章第三節では、韓愈の文學觀が、「博學鴻詞科の試に失敗してから元和元年（八〇六）の六月に權知國子博士となつて待望の中央政府の官僚に復歸するまでの不遇不平の苦澁にみちた十年餘の間、……徐々にはあるが、ぬきがたく韓愈のなかに形成され」（五〇六頁）ていつた經過が、その間の彼の生き方と密着して述べられている。自己の經驗した負性をバネにして文學思想の形成されてゆく過程が明快に描かれて、こういった視點の導入は成功しているかにみえる。

しかしながら、あまりにもあつけないという不満もまた拂拭できない。それは、韓愈みずからの經驗の一要素と、それと對應する彼の思想の一面とを整合的に直接結びあわせる操作によつて（兩者の間に介在するさまざまな變數を捨象することによつて）、彼の思想があざやかに浮かび出ている反面、韓愈のような經驗をすれば、ほとんどの人が彼と同じような考えをもつようになってしまふ印象を與える。つまりテキストそのものの分析を通して韓愈の思想が

得られたというよりも、彼の生涯（の一部）から導き出される思想の結論を、補強するだけの役割しかテキストははたしていないのではないかという危惧を抱かせるのだ。

同様のことは「顔之推の生活と文學觀」の節についてもいえる。「生活と文學觀」の標題が示すように、「精密に傳記的資料を検討し取舍選擇する」手續きをふまえた上で、彼の行動生態をとらえて「再構成をおこなうなかで、複雑な顔之推の人間像にできうるかぎり接近して」（四二四頁）彼の文學觀を探ろうとされている。

「梁の武帝が齊の王位を奪ったとき、齊の恩義に感じて發憤飢死のかたちで節義を守り、武帝に抗議をおこなった祖父顔見遠の凜然たる氣骨。頻繁に梁朝建康の宮廷から招徴をうけながら、ただ自分一個の榮進のために、死を賭して見遠が表現した抵抗を、無意義に終らせまいとして、湘東王江陵藩府から一生離れなかつた父顔協の潔癖な執念の持續」（四四三、四頁）や「顔之推は數度にわたる喪亂戰陣の中をかくぐり、妻子を抱えて生きねばならなかつただけに、生きること無用なものは容赦なく破棄せねばなら

なかった。……自ら身につけた才能と學問を認められ、それを適宜存分に活用することによって生かされ、生きてきた」（四四八頁）のは事實であるにしても、それと「典正な詩文への希求」や「但學士となれば、自ら人と爲るに足る。必ず天才に乏しければ、強いて筆を操ること勿れ」（家訓・文章篇）というストイックな文學觀」とを即イコールに結びつけるのは、顔之推の文學觀の總體をかえて狭めてしまふのではあるまいか。之推の文學觀のこういった一面は、むしろ「家訓」という遺訓・家誠の性質に依るところが大きいように思われる。荒い波浪の生活をくぐりぬけてきたがゆえに、快樂主義的文學觀をもつことも大いにありうるわけである。

むろん林田氏もこのことは考慮に入れておられるが、「顔之推の思想と文學にしても、この生活總體の認識をぬきにしては、とうてい語ることではない」（四二三頁）のは當然であるにしても、こうした方法は、彼の生活から得られた文學觀についてのイメージ（まだテキストによって修改されていない假説の段階の）を、先入的にテキストの

中に讀みこんでしまう大きな危険性をはらんでいる。それを克服するためには、テキストそのものの論理的分析、他の文人・思想家のテキストとの比較・對照、といった手段が有効と考えられる。事實、この方法で、抽象的な論議にとどまることなく分析をおこなっておられる箇所もある。

さきの「裴子野『雕蟲論』考證」など、『文苑英華』に「雕蟲論」として引かれる一條が、實は『通典』選舉志に收める三條の一つであること、そして「雕蟲論」が史書『宋略』の一環であること、が明らかにされる過程は誰しをも納得させる力にあふれている。

取扱う対象は時間的にも空間的にも本書と全く異なるが、その著書『フランス文藝批評史』上巻（一九七七、筑摩書房）の「あとがき」で杉捷夫氏は、この批評史を書きすすめる際にとつた方法にふれて、次のように語っておられる。

「……粗っぱい分け方になるが、美學的方法と社會科學的方法との對立の問題がある。この對立には文學の勉強を志した最初から悩まされた。今以てその悩みから完全

に解放されているとは言えない。人によっては餘けいな悩みごとだと嘲笑なざるかも知れない。今の私は、文學の研究は鑑賞から出發して鑑賞に歸つて來る平凡な道行きにつきると考えて、一應自分を納得させている。」

ここで述べられている「鑑賞から出發して鑑賞に歸つてくる」態度は、テクストの絶対視・文藝學の方法につながる「美學的方法」から出發して、それを歴史的、社會的狀況の中で相對化する「社會科學的方法」を経て、しかもそのいずれのみにも偏することなく、再びテクストにもどってくるものといえる。いわゆるロシアフォルマリスムですでに知っているわれわれは、テクストのディスクリールそのものから出發しようとする方法を無視することはできないのではないだろうか。

しかしテクスト分析だけですべて事足りるというわけではむろんなく、今度はそれを歴史的文脈の中に投げこまなければならぬ。ちょうど、第三章第三節で、「雛鷓鴣賦」にみえる鳥の飛翔を阻止するイメージを何晏、阮籍、嵇康の詩に求め（もつとも、それらの間の差異の構造分析は不

充分ではあるが）、そこから危機意識を導き（一八一頁）、張華の心理およびパーソナリティの分析（一九〇頁）を含めて、「思想的、文學史的觀點から時間的な縦の座標をさぐり」「張華が生きた狀況との對應のなかで、空間的な横の座標をたしかめ」（一七六頁）幅廣い展望に立つて位置づけようとしていられるように。

最後に、評者が感じた強い不満は、本書に引用された資料およびその読み方にかんして無視できない疑問が少なからずあったことである。大部な本書のすべてにわたって言及するいとまもないが、たとえば第六章第二部の前半だけをとりあげても、『唐書』李華傳を引用して（四五八頁）、

「李華は士類を獎愛し、名に隨つて重んず。獨孤及・韓雲卿・韓會・李紆・柳識・崔祐甫・皇甫冉・謝良弼・朱巨川の若きは、後に執政顯官に至る。」（傍點評者、以下同）

と訓んでおられる所の原文は「華愛獎士類、名隨以重、若獨孤及、韓雲卿、韓會、李紆、柳識、崔祐甫、皇甫冉、謝良弼、朱巨川、後至執政顯官」である。ここは「華は士類を獎むるを愛み、名は隨つて以て重んぜらる。獨孤及、韓

雲卿、……」の方向に讀まないと意味が通じないのではないだろうか。

また、同蕭穎士傳を引く（四六〇頁）

「穎士は人の善きを聞くを樂しみ、後進を推引するを以て己が任と爲す。李陽・李幼卿・皇甫冉・陸謂等數十人の如きは、獎目に由つて皆名士と爲れり。天下に知人を推せば、蕭功曹を稱う。嘗て元德秀に兄事して、殷寅・顏眞卿・柳方・陸據・李華・邵軫・趙曄を友とす。時人は語つて曰く、殷・顏・柳・陸・李・蕭・邵・趙は能く其の交友を全うすと。」（〇點 著者）

のところが、問題となつてゐる原文「……天下推知人、稱蕭功曹。嘗兄事元德秀、而友殷寅、顏眞卿、柳芳、陸據、李華、邵軫、趙曄、時人語曰、殷、顏、柳、陸、李、蕭、邵、趙、以能全其交也。」は、「天下人を知ると推し、蕭功曹と稱す。……時人語つて曰く、殷・顏・柳・陸・李・蕭・邵・趙と。能く其の交わりを全うするを以てなり。」と讀むべきだろう。蕭穎士によく人を見ぬく力のあることを、天下の人々が推賞して、蕭功曹と稱したのであるし、

書 評

殷寅以下の七人と穎士が最後まで交友關係を續けることができたがゆえに、當時の人々がこれら七人と穎士をまとめて呼んだのである。

「李華の詩文は四庫全集別集に『李遐叔文集』として收められてゐる。そのなかに『贈禮部尚書清河孝公崔沔集序』と題する一文がある」（四六七頁）として、李華のこの集序の冒頭を引用されている。（ちなみに『李遐叔文集』は四庫提要にも指摘するように『唐文粹』『文苑英華』からのよせあつめであつて、この文章も『唐文粹』卷九二にみえる。）

「文章は作者（詩經の詩人）に本づき、而して哀樂は時に繫^かわる。作者に本づくは六經の志なり。時に繫わるは文（王）・武（王）を樂しみ、幽（王）・厲（王）を哀しむなり。立身揚名は國に有り、家に有り。化人成俗は安危存亡なり。是に於て之を觀れば、志を宣ぶるを言と曰い、飾りて之を成すを文と曰う。……」

傍點部分を林田氏はいっただう解釋されてゐるのだろうか。原文は次の通りである。

「立身揚名。有國有家。化人成俗。安危存亡。於是乎觀之。宣于志者曰言。飾而成之曰文。」

林田氏は、李華の文學觀は「内容が古直であるばかりでなく、文體のリズムも又古直である。」(四六八頁)と指摘して、原文を一部引用される。そして「いちおう四言・六言のリズムが基調句を構成しているが、その間に五言三言七言或いは二言のリズムが適宜に配置されていて、六朝駢文の臭氣を意識的に拂拭している。例えば『於是乎觀之』の句は、『於是觀之』でも充分意味は通ずる筈であるが、あえて乎の助字を入れて、四言のリズムをこわしているのは意識的である」といわれるが、「於是乎觀之」の「乎」は、四言のリズムをこわすためにあえて入れているのだろうか。「於是乎○○」の形式が『左傳』によく出てくることは、われわれの氣づくところである。たとえば定公十五年に「夫禮、死生存亡之體也。將左右周旋進退俯仰、於是乎取之。朝祀喪戎、於是乎觀之。」とあるが、李華の文も同じように、「於是乎觀之」は前の文に付けて讀むべきだろう。つまり、身を立て名を揚げることに、國家をたもつこと、人民の教化、

國家の安寧と危急存亡、こういったこととかわらせて「文章」や「哀樂」を捉えるべきだという内容になる。

それから、林田氏は本節の冒頭で、胡應麟の『少室山房筆叢』の

「大概、六代より以還、文は俳優を尙ぶ。唐の李華・蕭穎士及び次山の輩は、始めて解散して古文を爲る。蕭・李の文は平典を尙び、元・獨(孤及)は矯峻艱澁、怪にして且つ迂に近し」

という論及に着目して(四五三頁)、「胡應麟の論は、平典と艱澁の文體差を認めながら、駢文の文體様式である俳優を解散させて、古文をつくりはじめたのが、蕭・李・元・獨の諸公だといっているのだから、所謂『唐代古文』運動の始動期を、この四人の文人諸公の活躍期においていたことになる」とのべられているが、胡應麟のこの條は、元結(次山)の『元子』についての記述であること、引用の前半に李華、蕭穎士と元結の三人が擧がっていることを參勘するならば「蕭李文尙平典、元獨矯峻艱澁、近於怪且迂矣」は、「蕭・李の文は平典を尙ぶも、元のみ獨り、矯峻艱澁、

怪にして且つ迂なるに近し」であって、少なくともここでは獨孤及の名は出てこないはずである。

ついでに技術上の小さな問題に觸れておく。本書巻末に附せられた索引は、人名、書名・篇名ともに詳細をきわめていて、制作にあたられた方の労は多とせねばならぬ。それにひきかえ、本文の各節末の注に引かれる林田氏自身の論文についての記載は、参照として掲載誌名を擧げているだけで不親切である。たとえば、第二章第一節の注(4)に「拙稿『南朝放蕩文學論の美意識』(東方學二七輯)は、簡文帝の文學觀に視點をすえてこの『答張纘謝示書』の文學論にふれている。」とあるのを見てこの論文を閱讀したと思った讀者は、『東方學』二七輯をさがし出すのどころか。何のことはない。これは本書の第五章第二節「南朝文學放蕩論の美意識」にはかならないのだ(もっとも標題は少し改められているが)。こんな場合、本書の節數そしてできれば頁數が注記されていさえすれば、かなりの手數が省けることになる。技術上の小さな、しかし大きい問題である。

評者の紹介ははなはだ不充分で、本書のもつすぐれた特質で言い及べなかったところは少なからずある。反對に、感想は、林田氏の説に異を立てるのに急でありすぎて、妄言の羅列に終始したところがあるかもしれない。林田氏ならびに讀者諸氏に赦しを請うとともに、林田氏のこれまでの文學批評史研究がこの高くそびえる一冊にまとめられたことを改めて慶賀する次第である。われわれ批評史研究を志す後學は、林田氏がさらに廣い視野のもとで研究をすすめて高き峰をより高く屹立せられんことを期待し、同時にわれわれみずからもそれぞれのルートから頂きをきわめるべく登攀していかねばならない。

(京都大學 釜谷武志)